

# 大西祝における西洋思想と日本的なもの

磯野友彦

大西祝という人物についても業績についても、それほど一般に知られているとは思われないので、端的に比較思想の立場から論することは別の機会にゆずり、本論では彼の人物や業績を紹介しながら、明治二十年代において日本の大西祝という一学者がどうだけ、またどのように西欧の学術や文化を攝取し消化していたか、そしてそれがどのように日本の学術や文化と接していたかを、多少とも示したいと思う。

大西は元治元年（一八六四年）岡山藩士の子として岡山城下に生まれた。明治十年京都同志社に入り、十四年普通科を、十七年神学科を卒業。十八年一月に東京大学予備門第三学年に入り、九月に文学部に入り、文学部が文科大学と改称されその哲学科を修め、二十二年文科大学研究生となり給費を受けた。二十四年九月に東京専門学校（早稲田大学）に聘せられて、哲学、論理学、

倫理学などを講義した。三十一年二月にヨーロッパ留学のために東京専門学校を去ったが、大西の業績のほとんどすべては同校在職中になされたものであった。留学中に病を得て三十二年九月に帰朝し、翌三十三年（一九〇〇年）郷里岡山市で没した。享年三十六歳。終焉の地には後年、大西の友人坪内逍遙、弟子中桐確太郎その他によって石の記念碑が建てられたが、昭和二十年の空襲によつて破壊されたのを、たまたまこれを知った光田利市氏がそこの土地を購入して提供され、碑も復原されて、現在、光田邸に隣接したとの場所に保存されている。大西の墓は岡山市東部の操山にあり、操山の号がその名に因んでつけられたものであることは云うまでもない。

大西の人物や生涯については弟子の綱島梁川が書いた『文学博士大西祝先生略伝』（『大西博士全集』第七巻所載）にまとめられて

いるが、内容も充実し、在りし日の大西を髣髴させる名文である。

また、大西の縁故者である故松村縕（東京女子大学名譽教授）が『日本文学』（東京女子大学学年誌）に書いた大西の周辺の記録、同志社の学生時代から親交のあった徳富蘇峰が大西の人物、才能、資質を語っている記事、同時代の人ひとの回想や弔辭、さらに当時の新聞雑誌に載せられた大西の著書についての論評や廣告文なども当時をしのばせる。岡山県という独特的な文化的背景も大西を語る上に欠かせない要素である。

大西の著書、論文等は、彼の没後弟子たちによって刊行された「大西博士全集」（全七巻）に収録されている。著書五巻のほかに論文一七一篇、その他歌集などがある。日記、書簡の類はぜんぜん含まれていない。彼が使用した和漢洋の書物についてはたまたま彼が記録したもの除去してはまったく記載されていないので、著書や論文の典拠などを直接には知ることができない。しかし彼が古今にわたる欧米の哲学書や新刊書を数多く読破していたことは間違いない。また少くとも英・独・仏語に堪能であったことがわかる。イタリ語、ラテン語、ギリシャ語の心得のあつたことも確かであろう。標音を表わすカナ文字で書かれたギリシャ以降から近代までの西欧の人名や地名その他の個有名詞の発音は、当時の類書とは比較にならぬ正確なものであり、その語学力や読書力も抜群であったことが察せられる。

彼の西洋哲学に関する知識とその理解は「西洋哲学史」上・下二巻のうちに見ることができる。明治以降、西洋の哲学が哲学プロペーの問題としてとり上げられるようになったのは年代のようやく後半になってからである。それから十年くらいで思考様式も言語もまた異質な日本に於いて、西洋の伝統を消化して、古代から現代（十九世紀）までの哲学の通史を書き上げたことは驚嘆に値する。本書は現在もなお捨て難いところの多い質と量とを備えている。もちろん本書以前にも、末松謙澄、井上哲次郎、竹越興三郎、等のギリシャ哲学からドイツ観念論に至るまでの断片的な紹介はあった。しかしそのすべてを併せてもなお遠く及ばない詳細な知識とそれを総合統一する見識、個々の学者の学説を解説する明晰な論理と比類なき批判力、さらについさかも晦満のない平易明快な記述を見る事ができる。今ここにその一例をアンセルムスの章から引用してみる。

「……神は三一神なり。父と子と聖靈との三つが一の神を成すなり。子は父の言にして父なる神は子に於いて自らを言い表わす。なお技術家が自らの製作に於いて自らを知り自らを現わすが如し。子なる神に於いて天地万物（すなわち神の田満なる相の発現）の模範的觀念（イデア）あり。父は子によりて天地万物を造れり、語を換うれば子によりて天地万物に現わる。父と子とは現わするものと現わされた者との関係を有す。両者相離れたるに非ず而して其の相互の交通是れ即ち聖靈なり。此

第三のペルソナが一体の神を成すといふのは怪しむべきことにある。あたかも神の象に似せて造られたる人間に於いて想念 (memoria) と知力 (intelligentia) と愛欲 (amor) との差別はありながら尚お各々が他を含みて離れるべく一体を成し居れるが如し」（漢字、カナ、若干改め。以下同。）

キリスト教に深い共感と理解をもつてゐた大西にしてはじめてこのような適切な説明がなし得たであらう。中世の哲学にもギリシャや近世の哲学に劣らず、意義と重要性を認めていたことは、当時の日本の学者には思い及ばなかつたところであらう。

本書は一ヶ爾以後十九世紀の主要な学者の学説に及んでゐるが、とくにカントの項に最も多くの紙数をさしている。それは当時の哲学界の情勢から云つても当然のことであらうが、未熟な日本の地盤でカントの体系をこれだけよくまとめ得たものは、十九世紀の日本には他に見当らない。

大西の西洋哲学の理解の特色は、西洋の哲学をその本来の伝統のままに把握して、当時の他の多くの人々のように儒教や仏教、さらに意図的に構成された日本思想というような狭隘な偏見に妨げられずに理解し得たところにあると思う。その表現はいざれの場合にも心情に耽溺したところがなく、誇張もなく、きわめて素直である。大西以後も大西ほど明快に筋の通った哲学を説き、またこれほどきわだつた批判をなし得た人はまれである。そのことは彼のカントの解説においても見ることができる。それは今日から見ればもはや独自の研究というべきものではないにしても、當時としては何人も及びつかなかつた理解の水準を示している。

三枝博音（一八九二—一九六三）は「日本のカント移植者並びに解釈者たちは、カントが意識的に現実から遊離した学説を開拓することを自身で告白しているにもかかわらず、これを具体的で『深玄無比』なるものとして受取つた。大正（一九一二—一九二六）及び昭和（一九二六—）に至つてカント研究の大そろ發達した段階に至つても、この点に禍されてカント哲学を正当に解すことができなかつた。驚くべきはカントの全哲学説中の部分的なある概念を把えて『眞の实在』（西田幾多郎博士）を示すものとし、あるいは『神』の概念に充當する（田辺元博士）ものだと理解したほどである。』（『日本に於ける哲学的觀念論の発達史』一六頁）と述べている。私はここで西田や田辺の哲学に論及する意図はない。ただ大西には三枝がここに指摘したような歪曲あるいは解釈はなかつた、ということを言いたいのである。

以上は大西の『西洋哲学史』についてのほんの一、二の示唆に過ぎない。その論述に過不及のない均衡のとれた全体の統一は、これが日本で著わされた最初の西洋哲学史とは思われないほどみごとなものである。そしてそれを遂行させたのは彼の優れた論理的能力であった。大西は心情的または氣分本位にひとりよがりの『哲学』を語る者に対しても容赦なく批判した。例えば、井上円了の『哲学一夕話』を論評して後、「先生の説は眞に非難し難し、何

となれば明白ならねばなり。余は井上先生が人間に向つて人間の解し得べき言語を語らるるかを疑う」と述べたり、三宅雄二郎の「我觀小景」は想像的文学の著作としては読むに足りまじょうが、哲学上の議論としては一向感服しませぬ。……ことに哲学の研究には論理を欠いてはなりません。三宅君の書物は論理を欠いている」と考えますと評している。

このような哲学と「論理学」とがどのように関係づけられるかはまた別個な問題であるかもしない。しかしながら、日本では論理学は不幸な運命をたどっていた。それは哲学の一分枝のように扱われ、さらに、日本に特有な哲学用語のあいまいさも加わって、論理学そのものがきわめて非論理的な表現に裏づけられる結果となつた。それは正確な判断を下す術であるよりも、むしろ秘密の扉を開く鍵のように思はせられ、明快よりもむしろ難解を誇るかのようであった。

大西の「論理学」は、はじめから曖昧さや混乱を招く人名や用語を導入することなく、概念を確定的に規定しながら、とり上げた事項の一つ一つを明確に処理して結着させる。その論述そのものがきわめて論理的であり、鮮やかである。

本書の内容は形式論理、因明大意、帰納法の三篇からなり、アリストテレスからJ・S・ミルに至るまでの論理学を整理統一し、ときには図式を用いながら、数式を追うように明晰に記述を進めている。西洋の論理学に対して東洋の論理学としてインドの因明

を配したもの、私は寡少にして他に類書のあるのを見たことがない。そして彼はアリストテレスの論理学をはじめ、一般に論理学が決して形式論理学につくるものではないことを十分に知りながら、かえつて純粹な形で形式論理学を説いた。博引旁証の嫌いはない。毛頭感じられないが、論の及ぶところ自由自在で、論理学者の名は、彼が当時の歐米の論理学書を広く読んでいたことを裏書きしている。今ではあえて珍しくもなし De Morgan の数学的論法も、日本では初めて出てきた名であろう。「予輩の論述は以て智識論的論理学の研究に入るの準備となすに足るべし」と述べて本書を結んでいたのは、形式論理学の本質と効用性とをはつきりととらえていた上で云ひ得た言葉と思う。

大西は本書の他に論理学に関する数篇の論文を書いている。そこでは、因明が仏教研究のたんなる付属物としてではなく、また論理学がミルやシュヴァンソンの跡を追うような時代を早く経過して「論理学上独立の研究の起らんことを希望して止ます。」「論理学者の開拓すべき版図はなお渺茫としてその前に横われり。」というような展望がすでに明治二十年代の一哲学者によって描かれていたのである。

大西が当初から論理学に大きな関心をもつていたことは、彼の大学院在学時代の研究テーマが『良心起原論』であったことからしても知られる。この問題の研究はとにかく、予にとりては打捨て置くべからざるものにしありしなり」という彼の言葉は、彼

にとって良心の問題が決してたんに哲学あるいは倫理学の課題として論じられる講壇の学問に尽きるべきものではなかつたことを示唆していると思う。大西が「理想」という観念の生起する所以を究明して良心の原元を解明しようとする試みに、筆者は必ずしも満足し得ないが、今日ほとんど失われようとしている「良心」という重大な問題を、自己の切実な課題としてかかげたことに深い共感を感じする。さらに彼のとった研究方法が、はじめから一つの学説や一つの主義に固執せず、イギリス風の経験論的な立場、ドイツ風の觀念論的な立場など、それぞれの立場に身を置いて論評しながら自己の立場を模索している努力は、ひたすら西欧思想の輸入にのみ氣をとられていて、ややもすれば主体性を失いがちな当時の日本人の研究態度としては、珍しいとさえ云えるのではなかろうか。

この態度は彼の著書『倫理学』にもつらぬかれている。それは倫理学という学問の成立する諸条件、行為の諸要素を分析し、倫理学上の諸説を、直覺説、形式説、権力説、自己快樂説、公衆的快樂説の五型に分けて論じている。本書で引き合いに出して論評した学説は、どの章でも西欧の学者の諸説が多いが、直覺説の章で儒教道德を論じ、権力説のところで荻生徂徠をとりあげているように、必ずしも西欧の学説ばかりではない。しかも儒教思想や徂徠の学説の分析は、いわゆる儒学者たちの態度とはかなり異つた新鮮さをもつてゐる。とにかく、大西はそれらの学説の特徴や

にとつて良心の問題が決してたんに哲学あるいは倫理学の課題として論じられる講壇の学問に尽きるべきものではなかつたことを示唆していると思う。大西が「理想」という觀念の生起する所以を究明して良心の原原本を解明しようとする試みに、筆者は必ずしも満足し得ないが、今日ほど失われようとしている「良心」という重大な問題を、自己の切実な課題としてかかげたことに深い共感を感じる。さらに彼のとった研究方法が、はじめから一つの学説や一つの主義に固執せず、イギリス風の経験論的な立場、ドイツ風の觀念論的な立場など、それぞれの立場に身を置いて論評しながら自己の立場を模索している努力は、ひたすら西欧思想の輸入にのみ気をとられていて、ややもすれば主体性を失いがちな当時の日本人の研究態度としては、珍しいとさえ云えるのではなかろうか。

この態度は彼の著書『倫理学』にもつらぬかれている。それは

傾向を具体的に述べているが、彼自身の主張しようとした字説がいかなるものであつたかには及んでいない。その意味では本書は未完のままに終っている。

彼の道德や倫理に関する論文は、学的觀點から述べたものや社會の實際問題を論じたもの、あるいは古今東西の倫理説やその比較論など、廣汎多岐にわたっている。西洋の宗教や道德に比較して、孔子やその他のシナの教えはおおむね純然たるポジティivistischeの問題を避けて、ポジティivismではないにしても、メタフィジカルの問題を避けて、ポジティivistischeに傾いている特質を論じてゐる点など、彼の一面認識である。「倫理は實にペルソントペルソントの關係によって成り立つものである」と規定する点では、約四十年後に著わされた和辻哲郎の「人間の學としての倫理學」を連想させるが、和辻の倫理學は、大西がまさに打破しようとした既成概念を復活させようとした趣すら感じられる。

大西の倫理觀は自由闊達である。徳富蘇峰が「私は自分の長い間の生活の中に、未だ曾て大西祝君程の人を見たことがない。此人は實に人間の生粹だけを持って居た。何處を見ても此處が屑であるとか、此處だけは取除けた方が宜かろうとか思う所はないので、まるで人間の良い所のエキスを固めたような人である。純粋な人間のエキスと云うような人と思ひます」（蘇峰徳富猪一郎著『孝記者叢話』民友社發行、昭和五年）と語つてゐるが、宗教、社会、教育などに関する大西の評論には、こうした圓満な風格を感じさせ

るものが多い。

宗教、心理学、美学などの論文や、社会、教育、文芸などに関する評論は、著書としてまとまっているが、おりおりに書かれた雑誌論文や講演の記録などは『大西博士全集』第六卷「思潮論譜」および第七卷「論文及歌集」に、また若干のものは第五卷「良心起原論及論集」に収まっている。著書やそれらの論集の背景とした文献の数がそれに幾倍であるとは知る由がないが、たまたま『心理學研究』といふ被としては珍しく報告書形式の叙述で、歐米の心理学研究の情況を紹介しながら雑誌名を挙げてその特色を述べてある一篇がある。参考までにその論題を列挙する。

#### Psychological Review

#### American Journal of Psychology

#### Mind

#### Society for Psychical Research

#### Philosophische Studien

#### Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane

#### Algemeine Zeitschrift für Psychiatrie

#### The Brain

#### Revue Philosophique

#### Livista Italiana di Filosofia

二十世紀の米英独仏の諸論を讀んで、しかも大陸的として独立

した地位の確立についての心理学に注意を怠らぬものがあつた。

大西の『心理論』が今日のいわゆる心理学から見て、いかなる位置づけをおこなつたか、さればどうに評価されるかを私は知らない。しかし三篇にわたって論じた大西の『心理（の）説明』は心理学を学んで確立する方法を用意周到に解明してゐる所であらうと続いて四回にわたって論じた『注意の心理』もそのよくな学的具体的な説みとして、注意の生ずる心理現象をあらわす角度からの考察で、語句による空軽を慎重に避けてくる態度は、まさに科学者の態度である。『滑稽の本性』や島崎藤村に深い感銘を与えたとほわれる『悲哀の快感』は、心理論として枠を意識せずに読める興味ある分析である。

綱島翠川の「先生講学の傍、多方面の趣味に出入し、苟も田家修養に資ねば、あるのあれば、如何なる小技小道とこえども、心なへれを遇する如きいふべく、一切の趣味に各々相応の価値を描かん」としたり、多方の趣味の美わしく平衡調和を保つべく、謂わば、美術的性格は、以て先生性格の一面を描くべし。先生の文学に対する好尚は、幾んどその天性と云ひ、「（全集第七卷「略伝」）」云ふ記載は、彼の美学論を読めば如実に感ずるやうな所である。「審美的感覚を論ず」は、援用された諸家の説、例えばベルトマハ、スペンサー、ヘンン等はほとんど大西に駆使されたる觀があり、彼らはただ「半輩の今の論に必要な部分を説明したるのみ」に

過ぎない。

大西は近世の美学を理想派と心理派とに二大別して、ライプニッツ、ウォルフ、カント、シラー、ヘーゲル、ハルトマン等の理想派と、スペンサー、アレン、マーシャル、ギュイヨー等の心理派とが、「一派それぞれ独立して別な路を歩みながら「観美心は利益の念より離れたるものなり」という結論において契合する経路を、自由に諸家の説を引用しながら解説する。理想派が「莊大なる組織を作り上げて「其の外に一步も開拓すべき余地なきが如き感あらし」めてくるのに比して、「心理派の研究の結果は実際に見すばらしきものといわざるを」得ないが「美学上の説明は尚お此の方面に待つ所多し」と信じて、「むしろこの派の方面よりして研究の歩の進められんことを希望するや切なり」と述べて、心理派の方に重心をおいて説いている。たまたま同年（明治三十年）に、アメリカの美学史上に新機軸を与えたサンタヤーナの『観美感』（"The Sense of Beauty"）を手に入れ、「心理派に属すべき」新説としてこれを二回にわたって解説批評している。

宗教についていえば、家庭におけるキリスト教的雰囲気や同志社に入つてからの感化によって、一時は日曜に教会に詣で、日曜学校で教えて、熱心にキリスト教のために尽したが、後には形式宗教にあきらめ、教会にも出なくなつた、と云う。〔大西〕先生はクリスチヤンか、然り、先生が基督教に縁の深い事は事実で、基督教を離れては先生の一種特殊の品性の少くとも一側は解くこ

とが出来ぬかも知れぬが、しかも所謂正統派と称せられる人の信仰に対しても同情を有していられなかつたことも事実らしい。「或一種不抜の宗教意識を有していられたであろうとは推せられるが、果たして所謂クリスチヤンなりしか否かは分らぬ。」（梁川『大西操山先生を追憶す』）

井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」に端を発したいわゆる『衝突論』において、大西が「予は耶蘇教家が動もすれば吹聴するが如くに、其教を以て萬金丹的効能のある者は思はず。其教をさえ布かば萬事終れりと考える能わず。」「一宗教を奉ずる者は其宗教の下に全國民を住まわしめんと力むべきは勿論なれども、實際は仏教耶蘇教又兩者の衝突若しくは和合より生ずる新宗教的現象等の相研磨して始めて各自健全なるを得べしにあらずや。」（『当今の衝突論』）とさえ述べてゐるのは、前記の梁川の言葉を裏書きしてゐると言える。

そして梁川が『略伝』中で「先生は又後にはさきに厭棄したる形式的宗教も、之れを一の譬喻若しくは詩歌の如きものと見れば、一種の意義ありて、必ずしも排すべくにあらず」といふ見地を取るに至れるものの如く、随つて又汎く基督教以外の世の諸宗教に対しても、深厚なる同情を寄せ、云々」と述べた大西の宗教に対する氣持と態度は、その後に出たサンタヤーナの宗教論とほとんど表現まで一致しているところである。

しかし長く漫潤した儒教や仏教の慣習からくる一般のキリスト

教に対する故なき反撥や、それらの惰性と結びついた権力や権威の圧迫に対しては、大西はキリスト教徒として主張すべきところは決して譲らなかつた。

キリスト教が「非国家主義として教育勅語の趣意に反す」という井上の論に対し書かれたさきの『当時の衝突論』はその好例であるが、社会や宗教や教育について論ずるときには直接にふれなくともその信念は感じられる。「予輩は現社会に社会主義を唱うるの必要あることに眼を覆う能わず。而して宗教は由來社会主義と親しかるべき筈のものなりと考う。予輩は宗教を説く者が今一層大膽に平等主義を主張せむことを希わばあらず」（『社会主義の必要』）と説くとき、その宗教が何を指すかは前段を読まなくとも明らかであろう。

大西の著書、論文を通覧して感することは第一に彼の視野の自由なこととその多様なことである。彼の説くところに、それまで見えなかつた世界が開かれ、今まで障害として前途に横たわつていた困難がすべてのものとともに安らいで行くのを感じる。それは「真理を慕うことに安心せざるは、未だ誠に真理を慕わざるの致す所なり。豈に真理を得るをのみ安心の境界と謂わん」（『哲学的安心』）といふ彼の「哲学者らしき安心」の信念が、読者の「小世界觀」を打ち破るからであろう。

「極めて浅薄なる見識を立てて一種の小世界觀を構造し、其中に籠居し一時の偷安をなす者の甚だ多きは實に憫然の至」である

が「人生実際の出来事は常に此箱庭の如き小世界觀に衝突し彼等をして安心の念あらしめざるが如し。彼等の心中綽々たる余裕なきは畢竟唯我を基礎として世界觀を構成し其の内に住居するがゆえなり。安心立命とは種々なる解釈もあるべけれど、実は是れ一種の私心を満足せしめんとの念より生じ来るものに外ならず」「偏狭なる道徳家が寛宏の度量なくして常に他人を敵視し、而かも己が胸中に和樂の情なく遂に隱遁の念を発するが如きも亦、是れ一種の我執主義が其人の根蒂をなすが故なり。何程刻苦學問をなすも我執を去らざる限りは決して安心立命の地を得る事能わざるべし」（『小世界觀』）

教育勅語の解釈を批判して「若し勅語を楯に着て、倫理説場裡に争わんとする者あらば、予は之を卑怯なりと云わん。」（『教育勅語と倫理説』）と結んだのは、勅語を奉じて保身の術とする態度に対する非難ともとられるが、むしろこのような小世界觀に安住しようとする心情を破碎しようとした直言であるとも考えられる。しかも勅語そのものにあえて批評を加えようとした大西の態度は彼自身が云うように「藪を突いて蛇を出す」ことを好みかつたからであろう。

「師の学生に対するや已れに優れる者の其中に出でんことを求めて巻まさるを要す」（『師道論』）といふ言葉は、ソクラテスが青年を説く姿を思い起させるが、「誠に真理を慕う」者の心境であろう。勅語を大前提にして忠孝を最大の徳とみなす教育を、いち

おうは受け容れる寛容を見せながら、根底においてはそれを解消する宏大な氣宇を抱いていた。云いかえると、彼はその時代の精神構造を超えていたのである。

大西の著書、論文から受けける第一の印象は、自由な視界と多様な内容を含みながら、彼が一たび問題を定め議論を開かせると、根の生えたように現実性を帯びてくることである。それは、議論が空理空論に陥らないというためばかりでなく、提出された問題そのものが解決を要求する現実の緊張を含んでいるからである。しかもその問題は、彼が提出して分析し批評して示すまでは、自明のこと、常識的事実として、だれも疑いもせず氣付くことすらなかつた場合が多かつたのである。彼はこのような立場から発足してその不確定な要素を洗い流し、何人も承認せざるを得ない足場を立ててから議論を開かせ、自らの見解を構築して行った。

さきに挙げた教育勅語や忠孝論もその好例である。しかしこれについても戦後いくつか論じられたし、私も別に書いたので省略するが、彼が指摘したような意味で勅語を論じ、また忠孝の徳の絶対性を否定したものは戦前には絶無であったであろうし、戦後にも見当らないようである。この二論文は當時として、これ以上に、これ以外にも書きようがないのではないか、とさえ思われる。

『和歌に宗教なし』は大西がまだ二十二歳、大学在学時代の論文であるが、英詩、インドの詩歌、漢詩などと比較して、和歌に宗教性がいやじるしく稀薄、むしろ欠如していることを論じてい

る。和歌について筆者は無学であるからこの論文の価値を論することはできないが、「なるほど、そう云うものか」と気付かされたり、もし本論がそのような意味で価値ありとすれば、比較思想の課題として研究に値する好箇の題材ではなかろうか。

哲学・思想は用語の意味を確定することが最も大切な仕事であるにもかかわらず、基本的な術語においてはとりわけおろそかにされる傾向があり、事実、また困難でもある。大西の「知識論弁」は「知る」ということと「知識」と云うものが何であるかを、あたかも船頭が岸を突き川底を測つて舟を操つるように、四方八方から考察している。こうして「仮令い絶対に正確なる知識は建立し得ずとするも、」知識の何たるかを討究することは、決して無稽でもなければ無用でもないと、説く。そしてさらに「理性の権威」「理性とは何ぞや」「理性の意義を論ず」の三篇に發展して行く。

「理性は一切の事理を明にして己れみづからは明ならぬ者なるか。其語意のおぼろげなる、其の用い方の様々なる、是れ却つて其の便利なる所以なるか。」と問うて、理性という語の含むいろいろな意義を分析解明し、さらばに、これに隣接しあるいは相反する他の言葉を引き合いに出して、理性と云う語の明確な意味を描き出そうとしている。

この理性の解明にも見られるように平明に説いて、西欧の人名や学派名などを近なことを語るように平明に説いて、西欧の人名や学派名などを

引き合いに出すことは必要最少限に止まっているのも、彼の思考が地に着いていることを証明する。云いかえると彼は彼自身の云うことを理解しているからである。それは彼が批評家の天分に恵まれていたからである。学生時代、彼は「国民の友」に次のように書いている。

「詩才動くが故に詩人歌う、然れども必ずしも自ら其由て来る所を知らざるなり、詩人は能く美妙を直覺す、之を理解する者は批評家なり。」ここから彼は創作家と批評家の関係を述べ、さらに「一般の国民、新鮮の思想を呼吸し、活潑なる精神的運動を始めるに於ては、其國の文学望むらくは創作の時代に近からん、此時に當り社会の飛奔する種々雑多の思想を判別批評して、其眞価を明にして以て當時の思想界に先づ者は蓋し批評家なり。……將に來らんとする文華の進歩と其情態とは大に之に先づ所の批評如何に關係す。兩者の相関する所甚だ親密なるを知るべし。」と論じて、兩者の関係を「蓋し文學の世界に於て最高の勲章を受くる者は創作家なれども之を授くる者は批評家なり」と批評家の使命の重大なことを強調する。

この論文はさらに日本における西洋思想の研究の幼稚なこと、一部哲学者の説を西洋學問の標準と思いこむ誤り、などを具体的に指摘しているが、翌年に書かれた『方今思想界の要務』には冒頭にカントの『純粹理性的批評論』(原文のまま)の「序文」の「批評の時代」の部分を数行にわたって訳して引用している。

またさうにその後に書かれた『批評心』では主として日本の國家、社会の道徳的方面に関心が向けられている。

こうして見ると、大西が用いている『批評』という語の意味は、語義の内容からも、適用している範囲からしても、非常に広くかつ多様であることが知られる。もちろん批評、という言葉がもともと限定された内容や範囲だけで使われる、というわけではないが、大西がこうして用いているうちにおのづから特有な意味が付着していくのを感じる。それは、その時代の根柢に根づいている精神の表現であると云つてよいであろう。大西の次のような言葉はまさにその方向を物語つていると考えられる。「予輩にして若し東洋の思想に加うるに西洋の思想を以て、深く明に之を判別比較して我思想界に於ける批評的の要務に応じ以て其建設的要務に応ずるの階梯と為さば予輩に於て、豈に望なしと謂うを得んや」(『方今思想界の要務』傍点原文のまま)。

以上大西の著書、論文を通じて見られる三つの特色、第一に彼の思想が自由闊達であり、第二に思想の発想と展開が読者の生活感情から離れていないこと、そして第三に、批判力の抜群なことを述べて来た。この三者はともに相互に関連し合って大西の思想を形成していることは云うまでもない。さらにそれが、比較思想の方向に広がって「建設的要務に応ずるの階梯」となすのが大西の努力の志向であり、同時にその時代の要務であった。

大西の論文には日本人の思想と西欧人の思想とを対比して論ず

ることを当面の課題としたものも幾つか見られる。例えば『武士道対快楽説』、『ストアの精神と武士の氣風とを比較して我國民の氣質に論じ及ぶ』『司馬江漢の世界觀』(司馬江漢とショペンハウエルとの世界觀とを対照しつつ論じたもの)などが一見して明らかである。また老子に関する数篇の論文は、老子とストアやアナクシマンドロスとの異同を論じたり、ゲーテの『ヘルマンとドロテア』の一部と符節を合する点を指摘したり、さらに西欧諸学者の老子論に対し自家の見解を忌憚なく開陳している。これなどは東西思想の異質性を十分に心得た上で、その両者に距離を置いて見る予猶なくしては為し得ないことである。

日本並に日本人についての余人の為し得なかつた鋭い批判とその先見の明も、如上の広い視野と深い思慮と、それに加えて寛容な愛情の帰結であり、それこそすべての評論に浸み透っている大西の特色であった。

(ごその・ともひこ、哲学、早稲田大学教授)